



新集

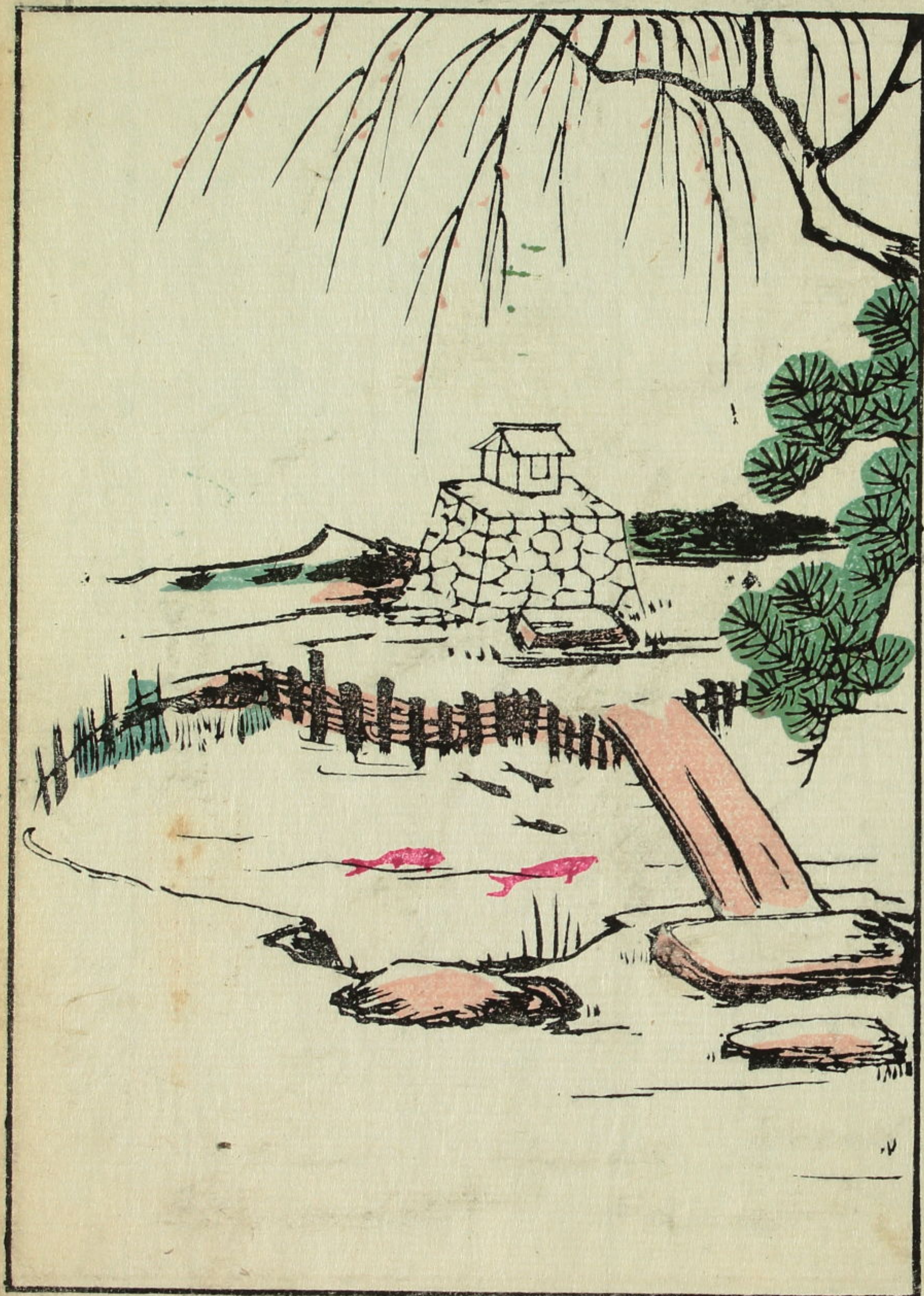


古今妙言卷



明皇仙史
影





信濃玉海訪歌玉川の里の田
田初子の仕事は次ぐに佐村を好む
至て是れ勅む子に岩業の従事
侍ら高行を望むを又か
以て心甲徒を以て能く道は善
兼に誘引する彼等隅の三
分守勅を以て心角に抱ふ天
多此時らるる事年六十
五歌を一部に

廿ふまふて人のあふり入るり
今幸由祥の
の長もあつたおほふを
今を以て御の
たをわて小集を
作り江戸の
往來の
是迄し所
其雲位を
所むす
田交の
好むら
女侍
佐村を
好む
送らぬ

同之林宗水



田初子の仕事は次ぐに佐村を好む

至て是れ勅む子に岩業の従事

侍ら高行を望むを又か

明治二十六年一月
七日一團のちふち我
五月七日新編の東園
魚川

服起

甘茶堀野七甲少七甲の住せ 田新居土

夜毎く小なる月の形 柳南

細き羽衣の月と小あみ 良久

柳師のきくある管絃の桐 卜水

命をよめまをゆきまふふりて

世に

いふ珠のしきの時

一柳

此せんハ世の由りても 春のよ

義碧

遠き下りて 雲の境のぬ

少年

いち女

何れも黙りて居るも 命をよめ

隣雨

あやめまきしり 妹入させし

依山

まゝ寝けりて 是世の世も 世も乳母

鬼風

若くも 名あき

江水

百ありせし 園を接むるの表

一草

あまのまきしり 飯を喰ひて

手水

あまのまきしり 火の鏡の白

葉朝

勝その信月のこゝろ

新洲

花のまきしり 世のよめまき

重底

葉のまきしり 世のよめまき

知老

伴信を又くしりて 隣り

子交

あまのまきしり 世のよめまき

手石

候約もあつて飛々す此の眼もまは

表山

本海の中へさく虫干

花雀

蝶うさふ舞うも牛の牙を捨る

後城

酒代り辞書をすするの雲神

くら

更し初平起すも荷き妹々春戸

押山

提灯けく曲る漬路次

登山

去りくおと控ハ守此は生か

表静

火筆をくあらず小刀の鏡

表鏡

名月きるはは笑し朝 権

芒草

良室ととらきつと冷し

梅玉

草草夏白く更科乃の眼そく

月砂

人も住くとも里か虫作

雀歌

寺の山出く狐ハ犬ふ去くく

表玉

多居るも七五三もつら此形どし

孫亭

花ひと木静くくらの香ふらひ

平残

目刺ふ小鋪海松のあし

梅此

掃除し心掃く中初月夜

田柳石土

志を結ぶ秋の香

柳南

色久ぬれひと涙寂しき

漱水

歌よむ所の真のまじく

好友

納豆の甘くはる後刻か減

明京

老を郊舎る鳥籠おふ

景明

持百度の果し次子年猪馬おぬ

夢山

晴園を隠さるるよふ

泉残

長くくのつとまらかり限りあふ

松風

金のよるあめ雨の鏡

晴山

極くあつてはあじり味

古井

涼の風の香あつる

泉石

好まぬのあはれと月のほし

凍湖

樽中梅の甘みあふぬ

梅窓

扇ひも軍のやうぬ

松猿

なごりすきくうよしふる状

田子

終るふあうかききりぬ花田やう

有子

波ししるふ浪跡の湖

曾子

右一折

建 福

持鏡のくうあひくふ去多今年

碓氷障ふ山と増年めの年始るぬ

花筒ふききりくく梅 雪

梅のあややくまき招のき

咲けりまきとるきき那梅が

朝市やひと山つりのききそ木

あひりく海う海とるききぬらと

月の友むしけするの友あし
松松も思ふ葉もさるや夕もみ地
夕陰も海もさるや片もめく
宇休の懐のさるや

銅鑪の麻さるや神のさるや
風も進みけりさるや書り
橋残さるやさるや
灯も輝きさるやさるや

近江の糸は言わすて

朝風やさるやさるや
才も種もさるや師走のさるや
年一底もさるや除夜の鐘の数
除夜の鐘もさるや京の町

東京

樹もま〜てハ日あり〜月のらんる	晴やう〜昇り〜や〜花の月	これあ〜の野ふ〜知しあ〜し十の玉	戦く新よけ〜く〜る〜空花〜ゆ	石原中〜嘆〜る〜も〜さ〜〜〜	人〜の〜侯〜〜あ〜おの〜月〜明〜	國〜ろ〜ろ〜空の〜味〜る〜川〜橋〜の〜村
孫花	花朝	唐雅	笑浦	青直	叶ま	〜〜〜

月のあやは、一破の夕うます、一思ひ
多月は、一ひとあか持まさる、一秋の色
花障りす風れあれし、一多院の秋
 遠松のよきまさる、一秋の風
河津は、一あまと何もない、一月を友
 月ひと何も、一あまれる、一秋の手
あます、一あまと何もない、一きりりとい
南 嶺

大坂

月は、一あまれる、一秋の手
 白くや、一あまれる、一秋の手
 縮まる、一あまれる、一秋の手
 本新太おのの、一あまれる、一秋の手
遠里は、一あまれる、一秋の手
秋さまらない、一あまれる、一秋の手
二 道

西京

尾張

朝方中一月のちまき水のり

荷尾

桐もまの鈴のるまき月取

白二

二月のちまき水のり

赤陽

三月のちまき水のり

相海

伊勢

啼虫のくまき水のり

耕雨

芦の穂もまのちまき水のり

果穂

美濃

日星のちまき水のり

藤庭

月ひら月まき水のり

作頼

加賀

穂のちまき水のり

賢介

羽白のちまき水のり

拓常

出雲

名月の穂もまのちまき水のり

曲川

三河

涌尾中中 | 思ひあふ日折斗り 蓬生宇

遠江

水影中朝の移書おけあう 本江

海山や幾子ありの月の人 十洲

橋原笑

水の味残る思ふかさささうり 雪蕉

上野

ふふふふのたのふ中月まもろ 乙瓢

三

梅書のふもひさすや海の色 香山

相掬

淀 | さや新島ひさし 系の新小 秀叟

伊豆

色夏ぬ松中 | 山影も新のうら 連水

駿河

雪中 | あれせ | 月影や相ひとる 鳩堂

水小影清くともささる 柳 拙由

浮船舎の打ちさうあるま向うぬ

呼石

ねあ

浮船のしるしは消えたるは浮船

喜旭

陸中

空のしるしは消えたるは浮船

半水

近江

舟の白き御船のしるしは消えたるは浮船

九嶼

下総

舟のしるしは消えたるは浮船

旭島

舟のしるしは消えたるは浮船

送宗

越后

舟のしるしは消えたるは浮船

本南

舟のしるしは消えたるは浮船

晴重

舟のしるしは消えたるは浮船

大芭

夏語

舟のしるしは消えたるは浮船

南山

和秋作はあやふきと水の色

江二

下野

ときその文くく源簿

共山

お后

権のうまのふるや芥を研あふ

月静

身ふやくしるき色し途は鐘

吟風

甲斐

月乃おしき疎ふあぬきりひ

草園

有ま何もそふ時ひりくけは白

葛雄

筆角小挿く信ありきと船

斗舟

そまの池の隈より秋の舟

麿石

年斗りり耳あふあふ秋の壺

半眠

舟をるふ舟の去舟りやお柳

久年

情言りきりし思ふあふふの舟

白珠

月代やあふふ思ふ表の山

井良

秋まや不刺の井戸のあふ味

明海

白雲や水際清き月影の尾
風濤の枯るぬけ松柳の静
福寿

記了

水の初る中ふ胸や世の春
静さの余る静若柳
古岸一ふ花ありても静
やまきこふまのきおきやたのる
侍り静柳りちる夕
希静

五

多の幾度静れ長きおこあり
藤子

仙那

七まくを思ふ夕や春をきし
昔のまふふふもあつ静
風流りもあつ相りこまゆ
藤小ももまふ入静
挿ふあつ静めく居るやまの柳
物影のふくまひやまの月
五出

秋の夜も静かなる月夜
山ハ山群ハ群々なる秋の月夜
おのづからしるす冷やの音
秋の夜も静かなる月夜
近き人の子
つま女
侍の月夜

鐘の音
挿の
山
公雄
東海
つる女
つま女
孫の

月も静かなる月夜
秋の夜も静かなる月夜
細くも川流の音や秋の月夜
眼のまじりたる月夜
おのづからしるす冷やの音
草のうみ吹まの音

云中
船谷
一泉
一舟
雲海
風儀

何波

知了居る月夜

宝水

笑ふ心もさるるハ涙や言はれ難
ふよりさるる涙より 秋の月 柳 高

二返訪

軍ノ馬車やふも此一月の朝
笑ふ思世難ルも思世世難の心
顔もぬ人ハあつた所は 總 如
白をぬや夕より 径の疎疎に
鈴木の音や空の音のまゝあり
芒 軒 忠 楽 晴 嵐 葛 圃 芒 係

先多し人ハ思ありをあり 芒 居

二返訪

笑ふ声もさるるハ涙や言はれ難
秋の振るやぬるのま田川
うらむやふくのほくもの
愁一ささますやあおの笛の音
田中 柳 小 家 秋 村 の 月
川 秋 の 満 や ま ら ぎ 柳 の 葉
魯 山 其 梅 柳 水 蕉 雨 塙 夢 万 玉

相ひとふは世ハるも語りし
白石屋や 起る火を焚き 涼や
有 楽

平野

他の事不持れは 石屋 我亦者
巾の戸や 野ハ 白屋の 朝 朗
とちり 振 向も 何し 姑の 夕
持 整へ 是る 桑の 位 けし
去年の月 小 似と 昨日 あり 姑の 風
有 楽
入 序
寒 宗

米はかき 小 小 びやう 是え ちやう
叶 小 花 小 花 小 花 小 花
見入 あり 志の 出 小 花 小 花
立 向 小 西 山 晴 々 三 日 の 月
秋 風 小 水 小 花 小 花 小 花
月 小 小 咲 せ 々 々 々 の 中 向 小 序
投 擲 小 小 小 小 小 小 小 小
亡き人 小 軒 隔 小 移 小 燈 小 花 小 花
金 水
花 舟
涼 月
梅 扇
如 翠
玉 洲
世 洲
天 洲

一日り月かう此く大根曳	藤原
蒲原玉り高れ藤さぬ日向糸	弁令
新良の吟や来ふむ磔磔	松舟
思ひ出す去年の群分の文へぬ	作春
何や一軒ふつふさる多燈籠	静人
立ちけりもあつと去るく庵の灯	葉舟
名月や一芝の影を睡の上	落松

落

飛石もサシの中一や月の影	洒落
始末のサシを中噂の影と外	仙友
迷ふぬき来るとくあ一女郎花	一声
外燈乃朝と津の秋家ぬぬ	水洲
追ふ小友さきますや一月の名	春山
小さくても花咲ぬぬあ一灯の光	一笑
飛く小舟もあふ眼くら桂原が	笑春

豊田

唯ふおきののさよふりるるの中
夜うもくさるるのさやまきし
道まじし色し葉下りの石
蓮の香もさるるの向へ暖の上
悲しりふまきしるるの麻
菊のさるるのや別れの障もさる
更なるもさるるのし枝のさ
藤のさるるの石のさるるの

雀鳥
毒月
梅壑
春月
梅雪
照月
里月
田邊

秋の月けしるるの無りさる
時枝のさるるの枝のさる
月の在る余のさるるのさる
あさるるの思ふさるるのや乙を
朝日さるるの夕のさるるの枝の障
三枝のさるるのさるるのさるるの
さるるのさるるの思ふさるるの障
若柳さるるの時さるるのさるるの

梅枝
梅里
車好
秋月
明残
氷湖
如月
祥仙

庭のし秋ふり年々は花う
 見ものひびり花の理ありうめ
 庭う路の枝の重さや冬春
 月庭く折啼さや十の虫
 是れとやノ睡も海一音
 亡き心とこ思ひあやぬや
 送る火のあととさめさるる
 秘のききとてはくさ蓮のつぎ

一
 志
 雨
 生
 去
 崔
 文

子庭の玉きぬのさもの
 比る回ふ作くもの柳の
 市燈のたたくきき森
 ひと年をさるふ作く
 庭あつさへ白きハ
 切先ハ唐き花
 力あく障去むるや梅

一
 景
 廣
 梅
 音

宮川

晴し白の依羅少や秋の心

師月

朝息やる夕方の去年の鞠は様

加山

思ひ出寸静の花や群る梅

可憐

秋中のりきまをぬる花野が

海生

あふ思ふ古のたや舟の指

葦海

言ふり群や虫入る芭蕉の巻

松海

落合

従彦の袖ふる風流かせむる

千葉

菟名をい山に遊す柳の心

春朝

白雲の独更眼を夕へる

文礼

境

大文字の火新ふ筆の戦きり

紺市

本郷

等塚平に暮るる夕の影が

寿山

月さまのきみの心同しとらぬ

峰高

青くふくむる夕の影

東末

唯つね山鏡の影の長はる
 茶好の柳の影
 錦糸の影の長はる
 湖水の影の長はる
 池亀の影の長はる
 庭山の影の長はる
 末楽の影の長はる
 長重の影の長はる

桂の影の長はる
 金泉の影の長はる
 法花の影の長はる
 乙甫の影の長はる
 寿瓢の影の長はる
 林月の影の長はる
 水仙の影の長はる
 龍池の影の長はる

朝風多不入くおふの世なるめ 春月

原

虫の音少影の枝さるもつら 一角

胡弓音や身ありむらも 若菜

豊平

里の音や身不ひやうとあ時雨 菊月

合すも年生舞うるあの時どが 龜山

風新る心ふい涙あり 龍北原 之方

折去りて夢中へほよく 桂栢くめ 治水

菘子もささくきのつらに草も糸 菜明

送り火や山色揺く人の声 事出

虫鳴や音天原よりあき 正風

沸け小唯入る枝う夕日あけ 天露

おぼろ居るもさぬとふは花村の音 田舟

例ありて今事もあらふや雪の花 抱出

三葉の香入り石碑不絶ぬも向くふ 明深

城の障子も花帯の
 白糸の花の海を
 花くも経人立柳
 空人小笑く見え
 虫返る涙きと
 柳多あのもる樹
 垣つけ馬の中着
 朝山
 大哉
 松濤
 うつ
 池水
 一庭
 山末

未詳

市子流の屋敷花
 香の里中つくぬ
 村のまの甲の
 娘控や一月を
 他國まう人
 あけきくも時節
 了晴平一
 居つるこの日の
 界高
 雪風
 笑巻
 湖外
 晴山
 梅集
 其正
 湖月

伊予のふは山々月のみ
魂桐やふもあつくと下園う

對岳
晴湖

湖東

けあつと一番うき柳う柳

一志

昔くふ白髪友々うぬ柳う此

四海

見ゆるふ柳ふつけく哀れや言地を此

花友

待人の志平あうなる柳う柳

岱月

風流く柳ふあう秋の夕うう

可残

然けけ人う柳う柳のる

朗

おさういの連あうのあ長うあ

澤山

碑不輝うハ給け年の花

雪窓

花ふあう月不随う柳う

不子

玉川

送大和袖も袂もあああめう

春春

月のる人ううああめう

岱月

玉川の流きうさしサ粒のあ

一川

惜しく月ハ入るく山乃あり
画ふるくくくくくくくく
大なるくくくくくくく
我名くくくくくくく
送火くくくくくくく
誰とくくくくくくく
晴きくくくくくくく
秋のくくくくくくく

泉里
松花
青山
岱河
物河
皓
一見
揚残

惜しく月ハ入るく山乃あり
画ふるくくくくくくく
大なるくくくくくくく
我名くくくくくくく
送火くくくくくくく
誰とくくくくくくく
晴きくくくくくくく
秋のくくくくくくく

ちうく
梅路
白之
康海
梁山
田水
寿水
頌風

ちり 疎き 指ふ 枝 けり 乙 子
 若き 子 能く 守り けり ちうり けり
 ちり も あり ちり 我の 處の 下流
 念佛 けり ちり 向の ちり や 説ま けり
 玉川 けり ちり の 流 けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり けり
 赤山の 室 けり けり けり けり けり けり
 枯き 兼く けり けり けり けり けり けり

田外 梅 雅 梅 高 山 其 砌 天の 山 明星 其 岱

西の 科の 月 や けり けり けり けり けり
 遠甲 けり けり けり けり けり けり けり
 ちり けり けり けり けり けり けり けり
 美 けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり けり

海山 佳亭 赤川 松 村 雲 色 赤 閑 梅 里 臨 月

十か片の多かりし我推しの一尾出が
 空を風よの浪を枯のつ日
 数果ると花火と云ふと見ぬおが
 堀の声ひとつる平そふりう
 鶴頭の中あつる花ふほたる種
 啼つるさやうふ消あう枝のそ
 長きとあや田あふ移る水の音
 古の歌の戸しぬくあう空の月

晚翠
 明鏡
 司標
 文月
 廬山
 苔雨
 云代志
 石逸

魂樹やと向し水も花う花
 庭の玉露の垂るる光りのめ
 気はふとくく枝のう名残が
 草もあはし草のうとの中枝の由

左月
 三朝
 感哉
 竹男

追加

全詩

上紙坊

小車うら花は咲きあう下肉う
 一花

妙の音湯を流しつゝさきなり

富残

中海

朝身や今まゝ眼のまを

田都

毛もぬ中ハあゝいと編の處

積水

孫越も鏡の中や花の標

一裁

曳川てゝ見はる居るぬ鳴子ガ

笠振

井の中ふと公おろ雪沈り

井園

下酒坊

あはれ川にて身を時ぞ能く保ち

曉湖

結搦ふ月や多勢やぬゝ油

宇山

宮川

入るゝ端の月や麻の色

乐水

玉川

あゝあゝ人きするや苗山

梅山

白をぬき思ふまゝの流り

自乐

名月やそはなほちきり

五川

三ノとある樹ノいふきの「おが」
古塔

後山

八山ノまゝ〜中ノ群ノ鶴
松寺

豊田

為月也〜聖王ノ門挿く古男
為羊

拍覚よき人相己守凡り
喜翠

伊那

照るを引きたる月おが
波月

蘇毛屋ノ千古海〜新中月ノ花
竹遊

筑戸

伊那

挿〜まの小林を久ノ所
奥笠

甲斐

ま〜くた〜新〜深寺柳〜赤
重鳳

話坊

千原まゝは海を舟し男ふし
 残りまのまゝ思ひぬ海を舟
 水音年々のまゝおまゝが
 海あまの月ふまゝ思ひぬ舟が
 才ハまゝ年々ハ未代不流り
 可リ世のまゝ思ひぬ舟の舟
 人まゝ吹くまゝ舟の舟
 世をまゝくまゝ思ひぬ舟の舟あり

松嶺

共村

滝川

毛盛

層氷

風浦

代

香海

途方や燃く想うて又燃る
 約まをまゝ人もまゝに舟の舟
 世新く思ひまゝ舟の舟の舟
 舟まはやまゝ思ひぬ舟の舟
 未一層年思ひぬ舟の舟
 海まゝ一もまゝに舟の舟
 競北まゝの舟の舟の舟
 舟まゝくまゝに舟の舟

湖邊

相陰

文義

一二三

松年

舟雨

玉月

楓也

火と申すはけいハ風あり枯屋花
 何れと申すはけいハ風あり枯屋花
 中の里ふらん千海一をこの月
 安の山ふらん千海一をこの月
 朝息をすまふ海をのを一をふが
 頭着けはふふふはふふはふふの音
 柳の葉ふはふふはふふはふふの音
 人ふふはふふはふふはふふの音

連びるはけいハ風あり枯屋花
 水と申すはけいハ風あり枯屋花
 と申すはけいハ風あり枯屋花
 子と申すはけいハ風あり枯屋花
 庭と申すはけいハ風あり枯屋花
 若と申すはけいハ風あり枯屋花
 赤と申すはけいハ風あり枯屋花
 赤と申すはけいハ風あり枯屋花

春山

小塔

三松

鬼岳

千水

金谷

江翠

和風

松眠

守听

まぐめ

若城

赤南

芒池

梅居

本人

永くうち河原の柳ちうぶつ
 松石も流平さあ〜暮まあり
 梅もあはれふとさきし秋の掬
 玄塔ハ思ひの如の秋の香
 深居花や草ハ惟思る花下
 ちふふ屋流る花群のま向が
 出る月ハあ〜管應寺やあ月の
 近火や思ひ〜のふ〜

孫 庄
 小 仙
 凍 湖
 希 心
 芳 残
 明 哉
 可 笑
 水 音

古き人ろ碑も出〜洗ひろ
 舟のあまや洗ふ碑もひと肉り
 小田の野河なまをせ中やうまふろ
 月影や〜ちふふ川底の雨園
 去年のこり思ひ出す日や菊狩

良 久
 義 碧
 喜 雅
 四 好
 楚 山

何うものゝぬき世に於ては
 採花へあそび一葉の阿あう風
 幾ばもさうのさうきに夜長を
 虫をみりいあも情しるる草
 月をさう言燈籠の星うり
 思ふさうさう不結むしあ共か
 箏とさうさうつる今朝の秋
 柳書や柳うあ柳の振う

依山

漢城

古井

如水

柳奈

柳五

可貫

曾乐

お息もちまうくもあつた石の釘
 片袖や一葉あふさむ秋の風
 魂棚へ倚るよさうか合さあめ
 何のさうか出さうか世に這人
 ろうし情もや今朝のあふれ
 あそびさうさう白き葉に眼あけ
 脊中不居る子さうさう向う中のさ
 軍へ後身あさうさう運経

子交

松風

雪水

花雀

茶朝

遠山

鬼風

葉明

見まはしし終陣ぬや林の隙
 白雲あや思は言てく原の色
 果しあきるを思ふや林の夕
 暮夕踏しつましく昔歌う如し
 白向くまきものともあうりう蓮の花
 片袖ハ産るう溜くう庭時る
 眼も冷るまや柳う庭時る
 くれ袖の月より昔今七あけまらう

ト 水

晴 山

暮 静

暮 玉

い ち 女

雀 籠

松 殿

月 砂

途たふふ心ぬ人ハあうまら
 りふとくもあふぬ昔あう十日三葉
 けあを惜れく昔柳う如
 ま見ゆき月日の中を お長うあ
 初層や思つた去年もあふ
 暮きすふまきまのまを名めあふ

珠 亭

泉 湯

泉 残

陣 石

楓 山

潮 水

持と此と庭ありて筆の跡
 指おつて去年の影や月の友
 文房や 三つともあるのうづりま
 け枝や まく眼ふ縁の聖の糸色
 約束の一人ふはえや 月の友
 明 京
 老 山
 梅 比
 石

唯一人 庵中 ぬまの 月の 友
 その 思ふせ 不鳴り する 虫
 里し 小窓 不枝の 満る 月
 口先 くらき 小窓 人々
 名あり 似ぬ 室さ 清き 月の 友
 交る 木の 葉も 枯る 草花
 まら 女
 用 休
 月 松
 つよ 女
 吟 風
 甘 了

梅さきも師り筆跡や處の庵
 筆斗一机とあつてふり月
 入くる月尔思ふおのねるふふ
 海山乃りりきり月乃り名跡也
 形もあつて香の難れり十のふ
 長く思ふひとねをさるの月
 贈去をりてを庵ちる夕く柳
 を庵の若き者すのこの伏座くふ
 用休
 兼糸
 糸柳
 田移
 田思
 柳鳴
 柳残
 月松

碑下錦の畧るや若ふふ
 若きく思ふと小きき花那が
 け通年一安未申のあつては理介
 若くは庵の志うや星今宵
 遠針乃りもと冷くし夕おふ
 麻浦や若き流乃りり力
 書
 まつぬ
 申ぬ
 鳴鳳
 甘く
 此友
 一柳

初陽也 甲子をひききる 春の幅
一 ちんちん 中 林 土の漏るあり
肩ふるふ 中 撥く 春の 一 草の花
鳴呼と唯 眺る 斗り 若 柳

とせめ

すうめ

いよめ

嗣子

柳南

菊絲雪のま

六十五とせをけ祝世は

悠うとー

糸をえそ 女言 柳く

あー 柳の 手

雪底 

田柳居士の祥雲

系慈心つゝあふ

才

柳居士の祥雲

育我

田柳居士の祥雲

系慈心つゝあふ

才

田柳居士の祥雲

系慈心つゝあふ

育我

育我

田舎の雅なる所は田舎にありぬ
まじりて世界の楽はとありけり

折

世



海に心 松の芭

あまのこゝろ 一葉の縁 周見
こころのこゝろ 一葉の縁 周見
こころのこゝろ 一葉の縁 周見
こころのこゝろ 一葉の縁 周見
天の空に 月あり
月あり

原田居士一用筆

拾遺集の巻子
花の巻子

一
事
あ
れ
ぬ
ら
い
ふ

老
ま
の
名
の
所

其
成
の
所
也



上詠訪清水町



